

高岡町埋蔵文化財調査報告書第15集

高岡麓遺跡第8地点

1997. 9

宮崎県高岡町教育委員会

例 言

- 1 本書は高岡町教育委員会が有限会社[]より委託を受け、平成8年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査地は大字内山2722番地の高岡郷土唐仁原家屋敷跡で、遺跡名を高岡麓遺跡第8地点とする。
- 3 調査の体制は次のとおりである。
調査主体 高岡町教育委員会
教育長 篠原和民
課長 小谷清男
課長補佐 梅元利隆
副主幹 春口洋子(庶務)
主任主事 島田正浩(調査)
調査指導 宮崎県教育委員会文化課
- 4 陶磁器については大橋康二氏(佐賀県立九州陶磁文化館)からご指導頂いた。
- 5 遺物の実測や製図は[](以上埋蔵文化財調査室)の協力を得た。
- 6 武家門跡の実測については一部写真測量(有限会社スカイ・サーベイ)による。
- 7 方位は磁北、レベルは海拔高である。
- 8 本書の編集は島田がおこなった。

目次

I はじめに

- 1 調査に至る経緯 6

II 遺跡の概要

- 1 遺跡の環境 6
2 調査概要 13

III 調査 13

IV まとめ 16

挿図目次

- 第1図 高岡町遺跡分布図 7~8
第2図 高岡麓遺跡周辺地形図 10
第3図 調査位置図 12
第4図 遺構配置図 14
第5図 整地層出土遺物実測図 15
第6図 土坑実測図 16
第7図 武家門跡実測図 17
第8図 武家門跡瓦実測図 18

図版目次

- 図版1 高岡麓全景 19
第8地点全景 19
図版2 第1号土坑 20
第2号土坑 20
第3号土坑 20
図版3 武家門跡 21
図版4 出土遺物 22

I はじめに

1 調査に至る経緯

1996年4月に有限会社[]から高岡町役場都市計画課に宅地開発に伴う申請書が提出された。これに基づき町教育委員会では開発予定地が近世の高岡麓を形成する一角に位置することから、有限会社[]との間において文化財保護法による協議をおこなった。その結果、遺構の保存状況を確認するための確認調査を町教育委員会が実施しその結果をふまえて再度協議することとなった。確認調査は5月9日に実施し、ピットや陶磁器片を確認した。それにより再度協議をおこなったが工法の変更は無理とのことから発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、経費全額を[]の負担とし、高岡町教育委員会が[]から委託を受け、1996年7月4日から7月31日まで実施した。

なお、高岡麓遺跡の調査は1992年から実施され1996年4月までに7ヶ所に置いて調査が実施されていることから、この遺跡を高岡麓遺跡の第8地点とした。

II 遺跡の概要

1 遺跡の環境

a 自然環境

高岡町南部の高岡山地中央部及び東部には白亜紀の四万十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、一部玄部岩、凝灰岩などの塩基性岩類が含まれる。内ノ八重付近の砂岩頁岩互層中には塩基性岩類に伴って、厚さ1m～2mのチャートが見られる。

高岡山地西部には、古第三紀の四万十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、高岡山地を南北に横切る高岡断層によって前述の白亜紀の層に接している。

高岡町の中心部付近及び高岡山地北部には、新第三紀の宮崎層群に属する砂岩、泥岩、砂岩泥岩互層が広い範囲で分布している。本層は四万十累層群を傾斜不整合に覆う海成層で、貝、カニ、ウニ等の化石を含む。さらに、町中心部付近に及び西部は宮崎層群を不整合に覆い第四紀の礫、砂、及び粘土からなる段丘堆積物、主にシラスからなる始良噴出物、及び主に礫、砂シルトからなる沖積層がみられる。段丘堆積物、始良火山噴出物は急傾斜とその上の広い平坦面や緩斜面から形成される台地状の地形を有している。沖積層は、大淀川、浦之名川、内山川、飯田川等の河川流域沿いに分布している。

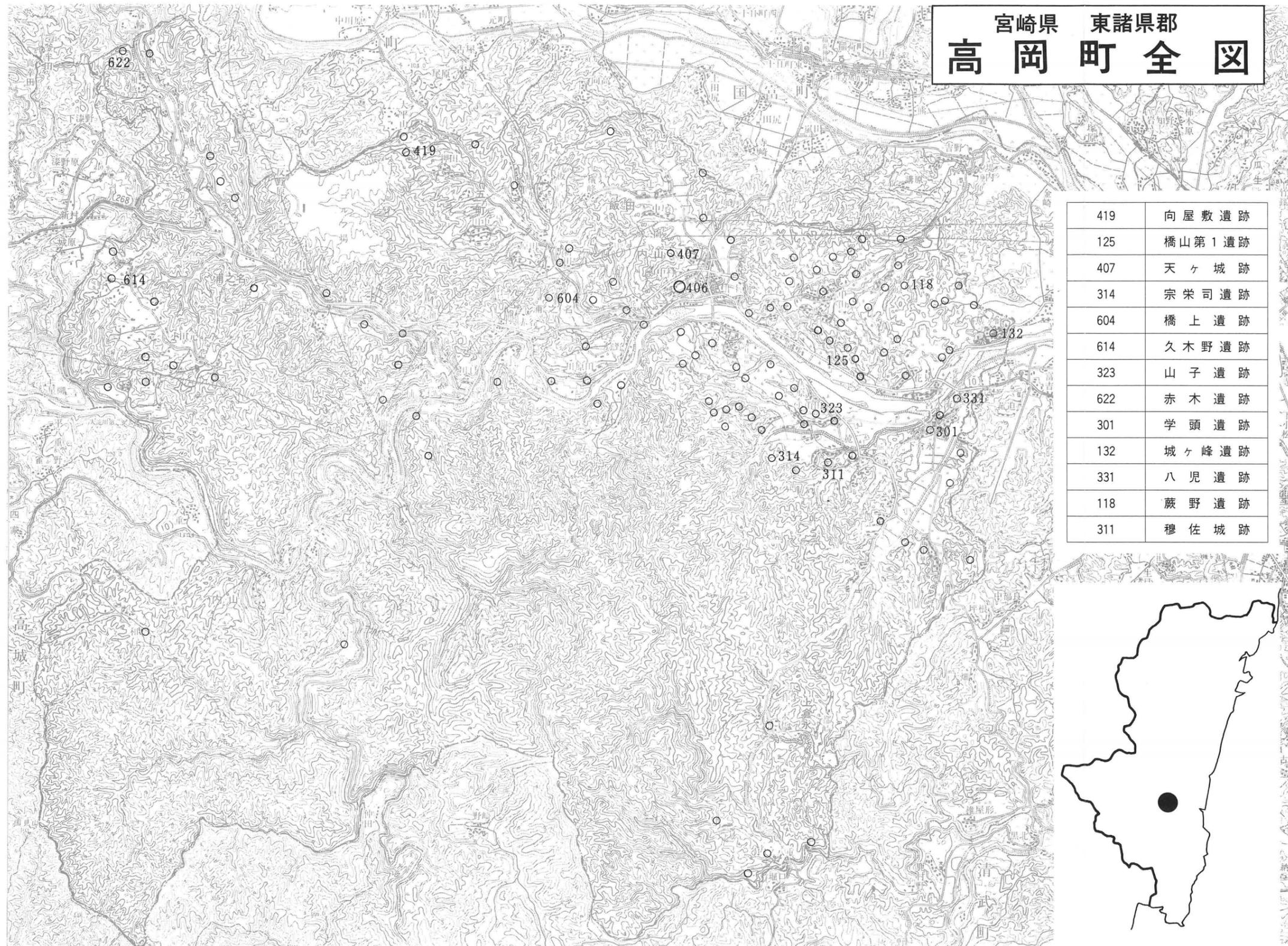
遺跡が立地するところは、大淀川と飯田川が合流する北岸の微高地上で北側に天ヶ城が控える。大淀川による水害の影響はない。

b 歴史的環境

70%以上を山林が占める高岡町は、東に位置する宮崎平野と西に広大に広がる標高170m以上の台地の間に位置し、狭い沖積平野や谷、そして小丘陵に生活の基盤をおいている。このような山々や丘陵などを含めた大淀川に起因する地理的条件は、その時々の人々が活躍するための歴史的要因である中のひとつである。

高岡町の遺跡は、現在知られているだけで140箇所あり、それらの遺跡のほとんどは、町中央を東流

宮崎県 東諸県郡
高岡町全図



第1図 高岡町遺跡分布図

する大淀川やその支流（内山川・浦之名川など）により形成された河岸段丘状に位置している。

旧石器時代では、表採資料として浦之名一里山地区の剥片尖頭器がある。また、1993年に調査を実施した向屋敷遺跡は、集石遺構と共にナイフ形石器やスクレイパーが出土している。

縄文時代の遺跡は、密度の差こそあれ、河川流域の小丘陵には必ずといってよいほど存在している。特に早期と後期の遺跡が多く知られており、早期は、柑橘栽培による遺構面の攪乱を受けることは少なく、残存状態も良好である。橋山第1遺跡・天ヶ城跡・宗栄司遺跡・橋上遺跡・久木野遺跡の5遺跡で、すでに発掘調査が実施されている。橋山第1遺跡は、早期と後期初頭の遺構遺物が検出された。早期は、幾形式かの集石遺構と、それに伴い、前平・塞ノ神式等の貝殻文系円筒土器や押型文土器、そして、環状石斧などが出土している。後期は、阿高系の岩崎式土器が出土している。また、多くの石錘が出土しており、当時の生活環境を知りうることができる。天ヶ城跡は、標高120mの独立した丘陵に位置し、集石遺構に伴い押型文を中心とした早期の遺物が出土している。また、九州一円からの黒曜石やサヌカイト製の製品が出土し、交易広さを知る手がかりとなる。表採資料からは、山子遺跡が以前から知られており、浦之名川上流に位置する赤木遺跡と同様に後期の貝殻条痕文土器が表採される。

弥生時代では、学頭遺跡があげられる。学頭遺跡は複合遺跡であり、時期は中期後半から終末までが確認されている。河川に挟まれた舌状の微高地に位置する生活遺跡である。また、城ヶ峰遺跡では、後期の遺物が出土している。古墳時代では、東高岡地区と浦之名一里山地区の丘陵を中心として遺跡が広がっている。

久木野地下式横穴墓地群で3基の調査が行われており、1984年の調査では鉄斧と玉類が出土し6世紀前半とされている。東高岡地区の古墳は未調査であるが、その中のひとつ高岡古墳周辺で古墳時代中期の壺と鉄製品（鉄斧など）が耕作中に発見されている。また、学頭遺跡では初頭～前期にかけての遺物が出土し弥生時代から引き続き集落が営まれている。それに隣接した八尾遺跡でも住居跡が検出されている。

古代は、文献によると高岡周辺は「穆佐郷」と言われていた。古代になると、宗栄司遺跡・蕨野遺跡・二反田遺跡があり前者2遺跡で調査が行われている。蕨野遺跡では、9C後半の土師器生産に伴う焼成遺構が検出されている。

中世では、12世紀に「島津庄穆佐院」といわれ、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の興亡の歴史の中に入っていく。この時代の代表的なものは山城である。南北朝期は、穆佐城が日向の中心となり足利氏の九州における勢力拡大の拠点となった。それ以後、小規模な山城が点在したと考えられ、現在10箇所以上（文献等では18箇所）を確認している。穆佐城は、三股院高城・新納院高城とともに日向三高城と称されているところである。縄張り調査の成果として、南九州特有の特徴をもつとともに、機能分化をもたせた山城として評価されている。その後、穆佐城は、島津久豊（8代）・忠国（9代）の居城、伊東氏48城のひとつとなるなど両氏の勢力争いの表舞台にあった。また、このころには、山城などの城郭遺跡以外でも町全体に数多くの遺跡が広がる。

この時期までの中心地が穆佐城周辺だったのに対して、近世になると天ヶ城周辺に一変する。薩摩藩は、天ヶ城（高岡郷）と穆佐城（穆佐郷）の裾地に多くの郷士を居住させた。そして、綾、倉岡とともに関外四ヶ郷として、特に高岡郷はその中心として薩摩藩の東側の防御の要として発展する。高岡麓遺跡では、計画的な街路設計がなされ郷士屋敷群と町屋群に分割されている。そして、第1次調査における町屋の調査で素堀の井戸や土坑等を検出し、大火跡と思われる焼土層を確認している。また1994年の

県文化課による調査では、武家屋敷の一面を調査し陶磁器類を検出している。近世の遺跡は、麓を含めて現在の居住地と重なる場合が多く、表採遺物や石造の墓標の存在からも参考となる。

c 高岡麓について

高岡麓の概要については、「高岡町内遺跡Ⅳ」を一部簡略化して下記のとおり掲載したので参照されたい。

『高岡麓は三方を山で囲まれ、残りの一方は大淀川に面し、地形的には防衛的要素を備えている。面積は約60ha以上、文字どおり天ヶ城の麓に広がる近世の都市機能を備えた空間である。

さて、諸大名が戦国大名から近世大名へと変質していく過程において、兵農分離政策によって家臣団を常備軍化し、中世以来続く在地性を払拭していったということは周知のことである。それは、おおよそ家臣団の城下町集住という形でおこなわれたが、薩摩藩の場合は外城制度がとられた。薩摩藩の領域には113の外城があるが、その外城の中でも高岡郷は最大級の外城であった。高岡郷の設置は関ヶ原合戦直後の慶長5年（1600）で、「高岡名勝志」によれば、島津義弘が関外の本城として久津良名と呼ばれる地に天ヶ城を命名し、外城として取り立てたのがはじまりとしている。設置にあたっては、伊集院の99戸をはじめとして領内各地から516戸の郷士が移住した。関外の郷ということと、佐土原へと通じる重要な街道筋に存在するということから、100石を超えるような禄高の高い郷士が多く集められている（「高岡町史」によれば100石以上の郷士が27軒存在する。）。通常ひとつの外城の中は、行政府である地頭仮屋、郷士の集落である麓、農民集落の在、漁民集落の浦、商人集落の野町に区分されている。地頭は通常鹿児島城下士が任ぜられる。外城創設当初の地頭は、任地において政務を指揮していたが、時代が下るにつれて次第に任地に赴かなくなった。そこで、日常的には郷士年寄・組頭・横目という「所三役」と呼ばれる役人が置かれ、ほかの郷士役人を指図して郷の自治を取り仕切っていた。この「所三役」になる郷士の家格は近世を通じて決まっていたようで、高岡郷のことはわからないが、隣の穆佐郷においては数軒の家によって占められていたようである。また、郷士の生活においては、藩より割り当てられる知行地からの収入がその主な経済基盤であるが、少禄の郷士などは、養蚕などの副業によってその生活を支えていた。知行地についても下人や小作人を使って大規模な農業経営をおこなっていた郷士はごく一部で、大部分の郷士が手作経営をおこなっていた。いずれにせよ、集住する郷士の規模化から見れば高鍋藩城下町に匹敵するような大規模な麓の中で、禄高と家格による秩序を保ちつつ、ひとつの城下町として近世の間、自治が行われてきたのである。

次に高岡麓の形態であるが、それを形成した街路設計は計画的におこなわれた。街路設計は、天ヶ城の大手門と搦手門にそれぞれ通じる街路を3町の幅で平行に設け、それらの街路の直行するように街路を設けている。この街路は搦手門に通じる街路を2分割することで直行し麓を天ヶ城側と大淀川側の二手に分ける。役場の正門前を走る街路がそれであり、西側に龍福寺西側の山頂を、東側には中山西側の山頂を望む。さらに役場と高岡小学校（地頭仮屋）の間にその街路に対して東に末広がり状態で街路を設ける。この街路は薩摩街道といわれ、西側に先の街路と同じ龍福寺西側の同じ山頂を、東は丸山住宅団地奥の尾根頂部を望む。これらの4本の街路を基本としながら、さらに数本の街路を設け大街区を設定している。自然地形からの制約の中での最強の防衛としての街路設計と考えられるが、十字路がいたるところでみられ俗に言う袋小路的な街路は全く見られない。薩摩藩の東の守りの要、「関外四ヶ郷」の中心外城という緊迫感はさほど感じられない。

屋敷割は、地頭仮屋を中心に郷士屋敷が拡がり、天ヶ城の大手門から通じる街路沿いと大淀川周辺は



第3図 調査位置図

町屋が広がる。郷土屋敷は、地頭仮屋周辺では敷地が広く離れるほど狭くなる傾向がある。また、町屋を挟むように大淀川河岸や飯田川周辺に、さらに高福寺（現内山神社周辺）の門前にも郷土屋敷が点在している。町屋は間口の狭い短冊形をなし、新町、上町、下町と呼ばれているところに集中して存在する。このように郷土屋敷群と町屋群は意図的に分けられたものと考えられる。

高岡麓における発掘調査は、過去7ヶ所（その後平成8年度は第10地点まで調査を実施）で実施している。第1地点では、町屋を調査し素堀の井戸跡や柱穴を検出し染付や摺鉢（19世紀前後）が出土した。第5地点（現郵便局）では、5世紀中頃の竪穴住居址2軒と幕末時の武家屋敷跡（黒川氏屋敷跡）や土坑や溝状遺構が検出され、遺物も17～19世紀（18世紀後半が中心）のものが出土している。第6地点では、海老原氏屋敷跡を調査し、根石を伴う柱穴や肥前染付（17世紀後半～19世紀）が整地層から出土している。第3・4・7地点では遺構や遺物は確認されなかった。

2 調査概要

a 調査経過

調査は7月4日からの重機による表土剥ぎから始めた。前半は梅雨や台風などにより雨が多く粘土質のためか水捌けが悪く遺構検出に手間取ることとなった。調査区の南側はかなり大きな攪乱坑がいくつかあり遺構の状況がわからないため、遺構掘削は北側中心でおこなわれた。遺構掘削後、25日に全景写真の撮影のため空中写真を利用した。その後、全体図を作成し、個々の遺構の写真撮影と実測作業を終了した。また、武家門跡の遺構実測においては、期間的な理由から29日に平面の写真測量を実施し、31日に調査を終了した。

b 調査の概要

調査は1,300㎡を対象に実施した。遺構は調査区の北半分に集中しており、調査区中央西側に厚さ10cm程の整地層が約50㎡程残存している。遺構は家屋倒壊の際に削平されたふうで残存状況は良好ではないものの柱穴を含むピットとL字状に配置された土坑3基、溝状遺構、門跡等が検出された。土坑からは遺物の出土はないが、整地層から出土する遺物は染付碗などで19世紀前半におかれる。また、武家門跡と思われる遺構は、それを構築する際の堀形から幕末と思われる遺物が出土している為それ以降のものと考えられる。なお、基準杭は国土座標を用い10mで設定した。

Ⅲ 調 査

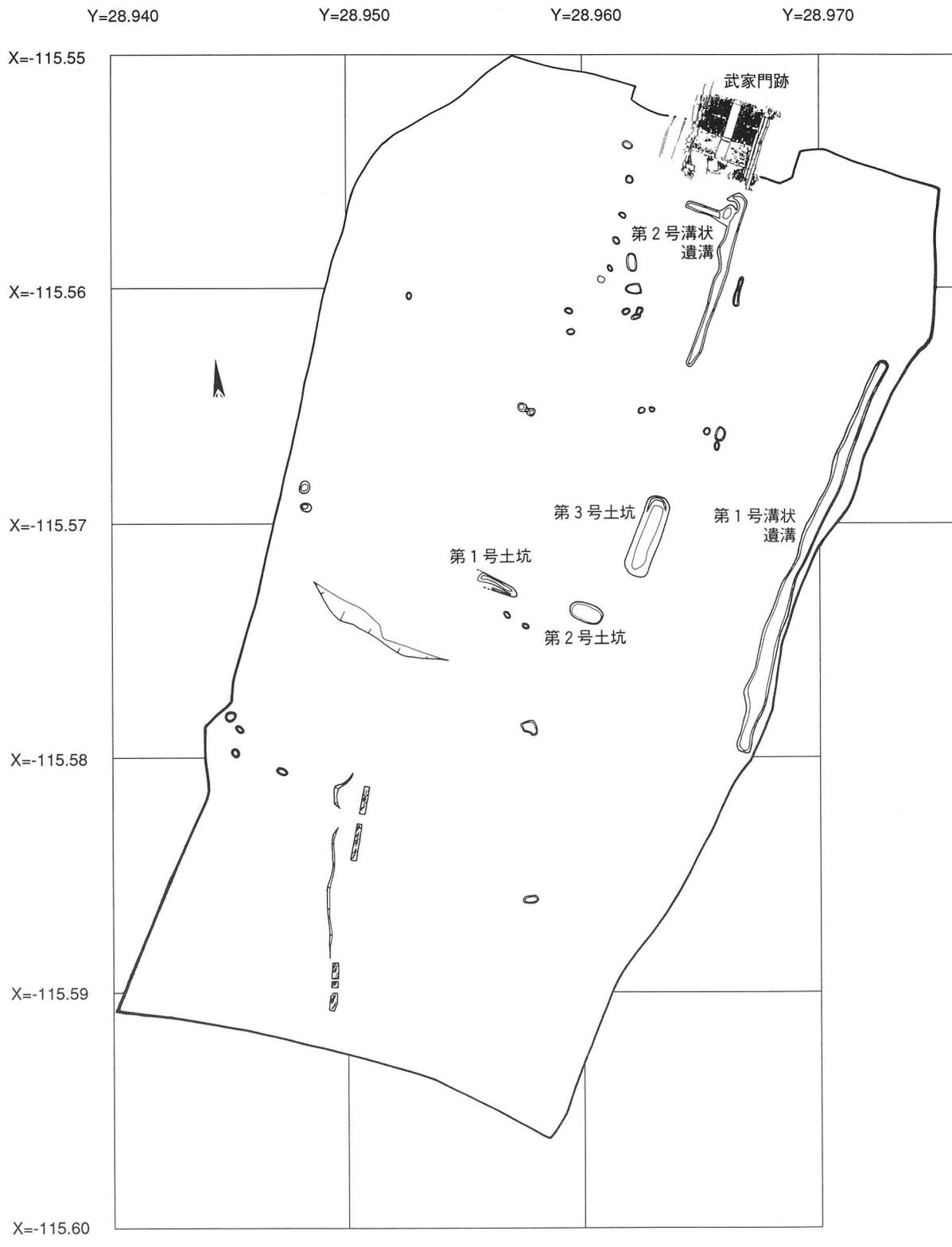
1 遺 構

調査地は、中央から南側が一段高くなり北側の方が低い。そして武家門東側がやや高くなるほかは全体的に平坦である。遺構は、調査区北側を中心に、武家門跡、溝状遺構、土坑、ピット、そして整地層が確認された。また、納屋等の基礎に使われたと思われる石列が調査区南側で確認された。

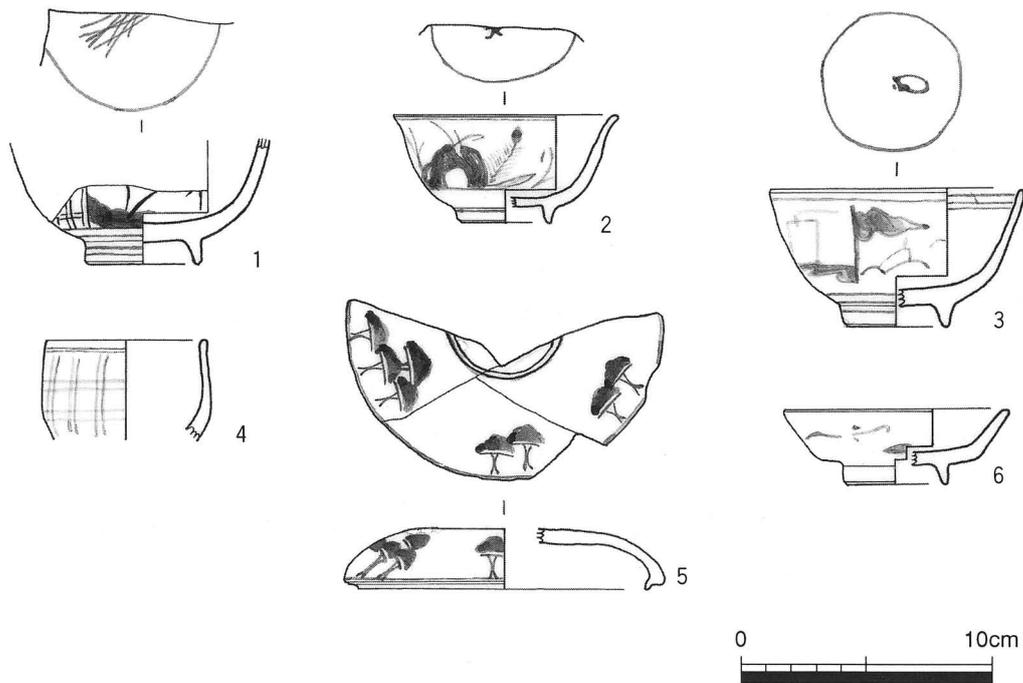
a 整地層

調査区中央西側で確認された。確認範囲は約50㎡と狭く、その原因は最近の家屋倒壊時の削平によるものと推測される。埋土は暗灰黄色粘性土で整地面での遺構は攪乱坑以外は確認されていない。遺物は染付などが出土している。

- 1 見込に文様を有する染付碗である。外面に格子文を有する。胎土の色調は明緑灰色（Hue10GY8/1）である。高台径4.4cmを計る。
- 2 見込に文様を有する染付小碗である。外面に草文を有している。口径8.6cm、器高4.3cm、底径3.4cmを計る。胎土の色調は明緑灰色（Hue10GY8/1）である。
- 3 見込に文様を有する染付碗である。口径9.6cm、器高5.5cm、底径3.9cmを計る。胎土の色調は明青灰色（Hue5BG7/1）である。
- 4 外面に格子文を有する染付湯呑碗である。口径6.2cmを計る。胎土の色調は明緑灰色（Hue10GY8/1）である。
- 5 かえりを有する染付蓋である。口径9.6cm、器高5.5cm、底径3.9cmを計る。胎土の色調は明緑灰色（Hue10GY8/1）である。



第4図 遺構配置図



第5図 整地層出土遺物実測図

6 染付。見込底部は無釉である。口径8.8cm、器高3.0cm、底径3.9cmを計る。胎土の色調は明緑灰色 (Hue10GY8/1) である。

b 土 坑

土坑は3基検出され、調査区中央にL字状に配置している。

第1号土坑

この遺構は3基の土坑の中では一番西側に位置する。この遺構の西側は後世の攪乱により削平されているが、残存部は長軸1.8m以上、短軸約0.8mの隅丸長方形を呈する。東西方向に延びるテラス状の段を有し、床面は平坦を保つ。遺物は出土していない。

第2号土坑

この遺構は3基の土坑の中では真中に位置する。長軸約1.4m、短軸約0.9mの隅丸長方形を呈する土坑である。深さは約10cmで床面は平坦である。遺物は出土していない。

第3号土坑

この遺構は3基の土坑の中では一番北側に位置する。長軸約3.5m、短軸約1.2mの隅丸長方形を呈し、北側に狭いテラス状の段を有する。床面は平坦で、壁面は約45°の傾斜で立ち上がる。埋土は暗青灰色粘性土で遺物は出土していない。

c 溝状遺構

第1号溝状遺構

調査区東端に位置する。屋敷割に並行することから柵に関係する遺構かもしれない。幅約0.6mで残りは浅い。

第2号溝状遺構

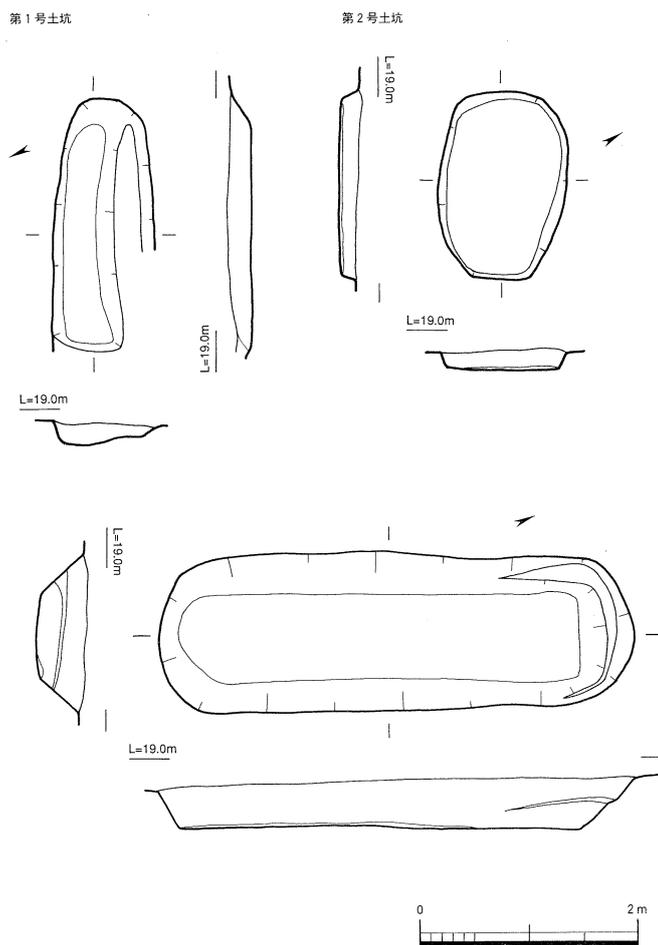
調査区北側の武家門跡南側に位置する。武家門や倉などの位置関係からそれに伴う雨落ち溝であろうと思われる。幅約0.5mをはかる。

d 武家門跡

調査区北側道路に面したやや東側に位置する。遺構は、武家門自体は屋敷が残っていた頃から既に破壊されており、切り石などによる下部構築物のみ残存している。武家門の通用部分は、道路から門までの距離約3.5m、高低差0.55mを計り、その間を切り石を使って階段状に4区画に仕切る。それらの区画すべてに3～5cm大の礫が10～20cmの厚さで堆積している。そして、長さ0.8mほどの長方体状の切り石を横方向に立てて並べ、それらの礫の土留めを目的として置いている。さらにそれらの上には、中央に長方体状の切り石を仕切り石に対してほぼ直角に

敷く。通用部の両側壁面は20～30cm大の礫を積み上げ、側壁面の土留めとしている。東側側壁面はその礫がほとんど崩落しているが、側壁下部には軒丸瓦を敷き並べた排水溝を設置している。また、西側では通路部分の造作の際の堀形が確認された。堀形は、側壁より約1.2m西側で確認され浅いテラス状の段を有する。門柱が建つところではピットなどは確認されておらず礎石をそのまま置いたものと思われる。この武家門は後方控柱付腕木門であろうと思われる。

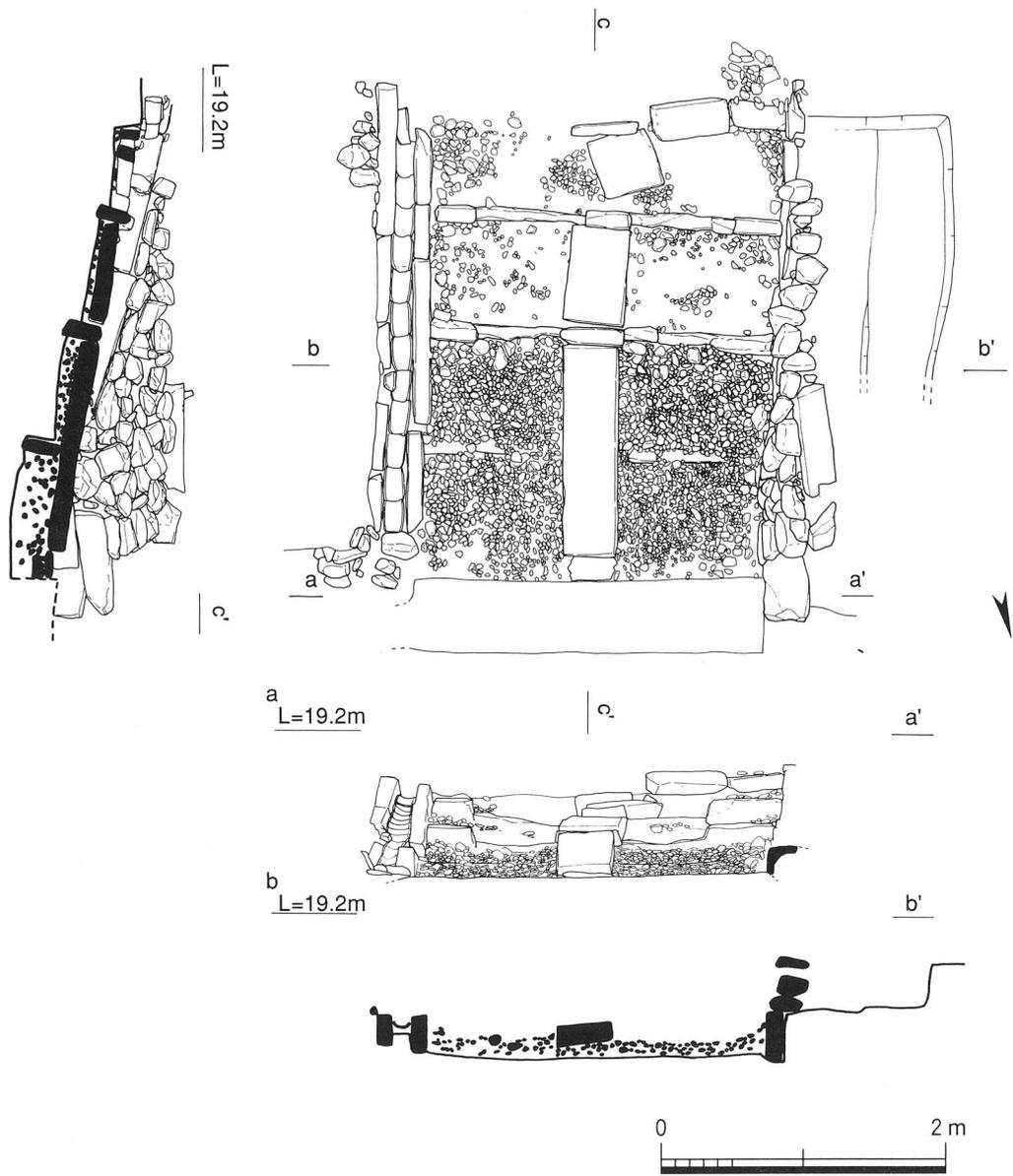
なお、切り石は溶結凝灰岩で、側壁の自然礫は砂岩を使用している。また、側溝に使用された瓦は長さ約25cm、幅14.5cmの軒丸瓦（7）である。外面はヘラ状工具による丁寧なナデ調整がなされ、内面は布目が残る。



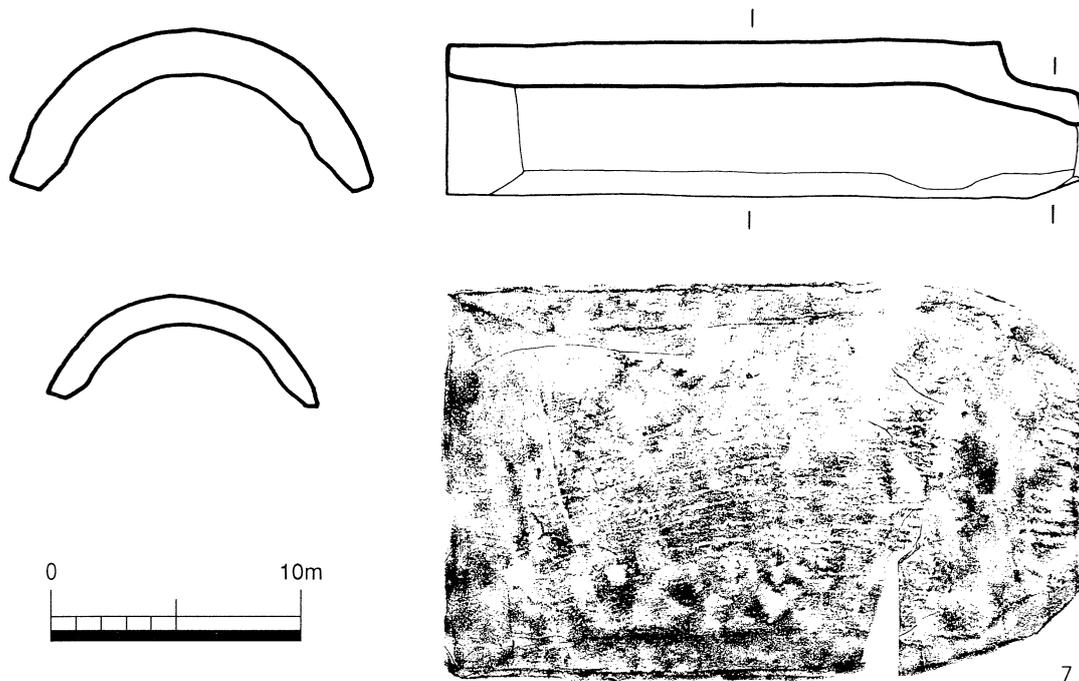
第6図 土坑実測図

IV まとめ

調査地は字石代の高岡郷土唐仁原家屋敷跡である。東側に一段低くなった敷地があるが、そこも含めて唐仁原家の屋敷地と考えられる。高岡の郷土屋敷は街路よりも一段高いところにある場合が多く、唐仁原家も



第7図 武家門跡実測図



第8図 武家門跡瓦実測図

その例外ではない。唐仁原家の場合、階段を上がり武家門を入ると東側に地面が一段高いところがあり、そこに倉があり、西側に母屋があったという。今回検出された遺構は街路に近い調査区北側を中心に検出されており、他の武家屋敷でも母屋などの主要施設が街路に近いところにあるという事実から、それらに関連する遺構と考えられる。遺構の時期は遺物の出土状況が良くないことから明確ではない。ただ、整地層からは19世紀の肥前系の染付碗などが出土し、武家門跡の掘形の埋土からも19世紀中ごろの遺物が確認されることからその時期の所産であろうと思われる。ただ、この遺跡からそれより遡るような遺物が出土していない。これは、この地の利用が19世紀前半以降であることが推定される。このことが、この石代地区全体でそうなのかどうかは今後の調査を待つということになる。関ヶ原合戦以後700戸以上の郷士を強制移住させてきたとされる高岡麓の特殊な麓形成の在り方において、当初から現在確認できるような屋敷割りが存在したのかなど麓形成の変遷を考える上でひとつの問題点となる。

図版 1



高岡麓全景

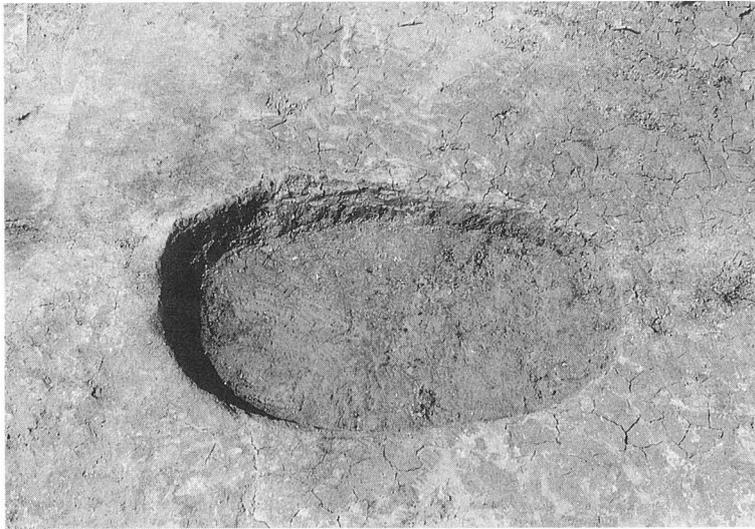


第 8 地点全景

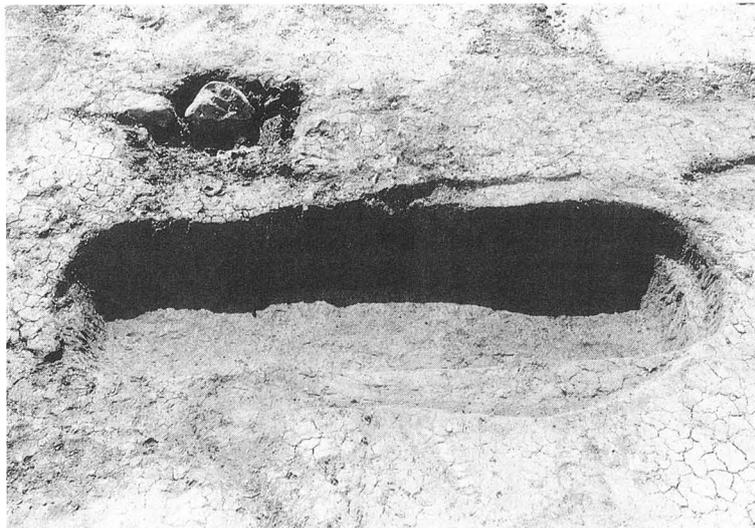
图版 2



第1号土坑

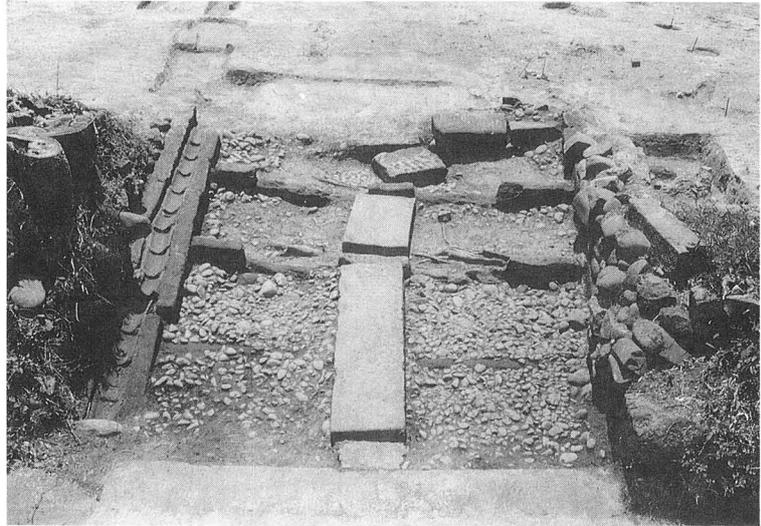


第2号土坑



第3号土坑

武家門跡



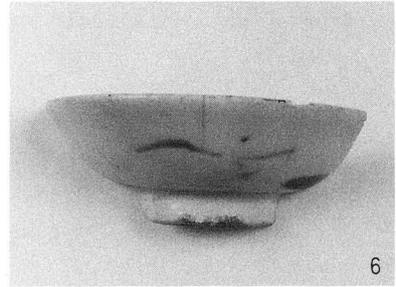
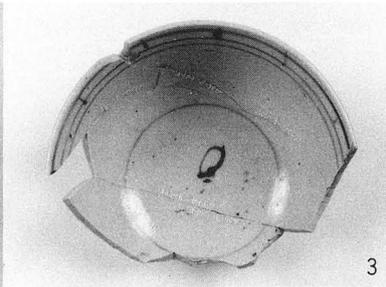
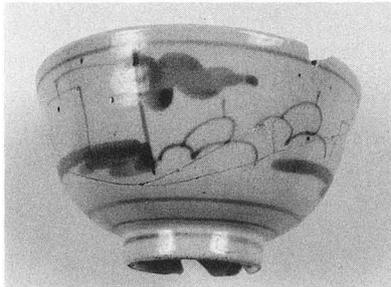
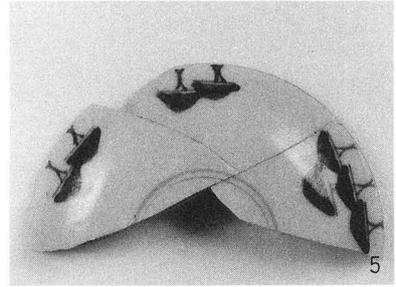
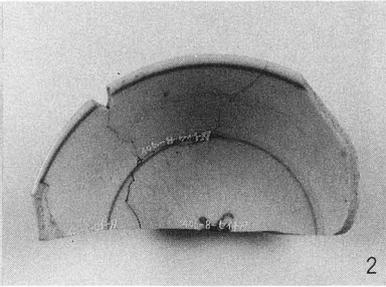
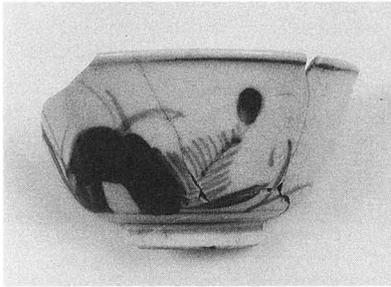
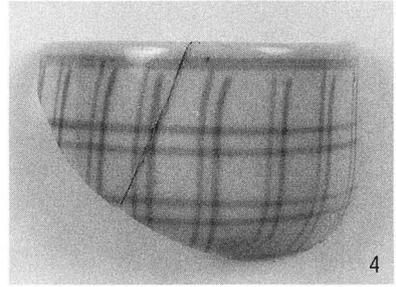
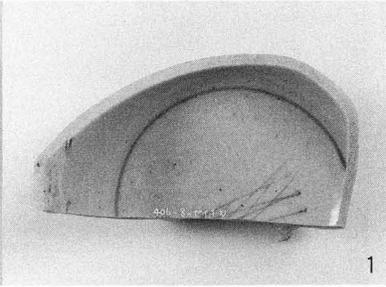
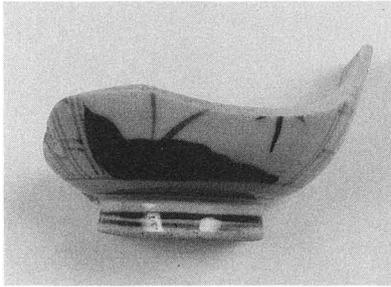
武家門跡



武家門跡



图版 4



高岡麓遺跡第8地点

フリガナ	タカオカ フモトイセキダイハチチテン
書名	高岡麓遺跡第8地点
副書名	石代地区民間宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	第1巻
シリーズ名	高岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第14集
編集者名	島田正浩
発行機関	高岡町教育委員会
所在地	宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887番地
発行年月日	1997年9月30日

収蔵遺跡名	所在地	コード		緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかおかふもといせき 高岡麓遺跡 第8地点	東諸県郡 たかおかちょう 高岡町 大字内山2722	45—381	406	31° 57′ 33″	131° 17′ 58″	1996.7.4) 1996.7.31	1,300m ²	宅地造成
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項		
散布地	近世 明治・大正	武家門跡	溝状遺構	土坑	磁器			

宮崎県高岡町埋蔵文化財調査報告書第15集

1997年 9 月

編集・発行

〒880-22 宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887

TEL 0985-82-1111

宮崎県高岡町教育委員会

印 刷 富士マイクロ株式会社

〒880 宮崎県船塚 2 丁目182-1 本村ビル1F

TEL 0985-27-4068